

あるむぜお 64

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO 64

2003年6月20日

七夕と 超銀河伝説

目次

- 1-2 七夕と超銀河伝説
- 3 最近の発掘調査 続報 府中にもあった！弥生遺跡
- 4 展示会への招待 むかしの道具展
- 5 民具発見 ①屋根裏の忘れられた呪物たち
- 6-7 ノート 星空を気軽に楽しもう！
- 8 元気！ 博物館ボランティアだより
- 9 昨年度報告・新刊情報
- 10 なまRIVER WARS ①水源林の奇跡



大地の下には火が燃えている・・・ゆえに大地より発するガスが空に上って銀河を成す……アリストテレス
 大地の下を太陽が通る時、空に映る地の影こそ銀河である ……ブリュタルコス
 空の継ぎ目が綻びて、焰が洩れて来て銀河をつくる ……ディオドロス
 ……そして1609年、ガリレオは自製の望遠鏡でその正体を知った・・・

現代文明が作り出した様々な光と大気汚染は、本来暗黒であったはずの夜空を侵略し、ひと昔前までは相当散りばめられていたものと記憶する満天の星々を、いとも簡単にかき消しています。これからの季節に姿を現す、こと座のベガやわし座のアルタイルといった一等星、すなわち七夕の星々などは、何とか自力でその輝きをアピールしますが、たとえばこの二つの星を分かつ天の川なんて・・・実際の夜空で認識したことはありますか？高い山の上や空気の澄んだ田舎ならまだしも、都会の夜空では残念ながら、もう見ることはできないでしょう。

天の川の中国名は銀河であり、他に^{めいカ}明河、^{てんカ}天河、^{カナン}河漢、^{ぎんガ}銀漢、^{うんガ}雲漢などといった異名も持っていますが、漢は漢水、つまりは中国に流れる大河などを示したものです。楊泉物理論には「漢水の精にして気発して天に^{のぼ}り^{えんてん}宛転して流る、名づけて天河という」と記されています。これは、天の川がエジプトでは「天上のナイル」、バビロニアでは「天上のユーフラテス」と呼ばれていた意味と酷似します。

銀河に関わる伝説を世界の国々について見ると、何といても多いのはこのような天上に懸かる川に見立てたものです。たとえば紀元前2000年頃のチグリスユーフラテス河谷にあったアッカディアでは、羊の群れが砂漠であげる砂煙を銀河の白々とした色に重ね、「羊飼の小屋の川」という意味で呼んでいました。また古代アラビアでも「アル ナアル(川)」、ユダヤでも「光の河」と言われていたそうです。

川に次いで天上に懸かる道と見る伝説が豊富にあります。銀河を表す英語のミルキーウェイ(乳の道)は、古代ギリシャの女神ヘラが赤児のヘラクレスに授乳していた時に^{ほとぼし}迸った乳の流れが銀河の始まりと伝えられたことに由来し、もうひとつの呼び名であるギャラクシーの語源のギャラもギリシャ語で乳を表します。ギリシャでは銀河を乳とか乳の輪と呼んでいました。古代エジプト神話では、女神イシスが悪魔ティホンに追われて逃げた時、麦の穂を道々こぼしたものが銀河に見えるとされていました。これは現在のシリアやペルシャ人の間で、^{くす}藁屑の^{わら}落ち散った様子を「藁の道」と称する譬えに繋がります。また、ギリシャ人が空に輝く銀色の道を挟んで神々の神殿が列になっているものと考えていたり、インドではようやぐ一人が通れる程のジグザグな隘路と捉え、神々がこれを通して天に昇る

と伝えられていたり、実に様々です。

同じ道でも、亡き魂があのかせへと行く道に見立てた伝説も多く、ギリシャでは偉人の魂が神の国へと渡る道と考えられていました。美しいのは北欧神話で、ワグナーの楽劇「ワルキューレ」に登場する女戦士が戦死した勇士を乗せて^{とき}関の声を^{かちゅう}挙げながらヴァルハラ^{ちんこんでん}の鎮魂殿へと馬を走らせる場面がありますが、ここに登場する道こそ銀河であり、彼等がまとう白銀の甲冑は光り輝いて北極光にもなるといいます。あるいは北欧の神々の高天原をアスガドと呼ぶところから「アスガドの橋」とも称されたそうです。

さて、銀河に関する中国の伝説として世界東西に有名なのは何と言っても七夕の^{びんぎゆうしよくしよ}牽牛織女説話でしょう。物語の内容には、あえて触れるまでもありませんが、中国及び日本で7月7日に行われる馴染みの行事「七夕」。中国では牽牛織女の伝説に基づいてこの日、^{さいほう}婦女子は裁縫の上達を祈ると言います。二つの星を恋人に見立てることは後漢時代(2世紀)の古詩に始まり、これが伝来したのは奈良朝の時代と見られています。

日本ではそもそも昔、女性が先祖の着物を^{はむあ}機織り機で織って棚に^{おなばな}供える「^{なばな}たなばた」と呼ばれる風習がありました。また、それを織る女「^{おなばなづめ}棚機津女」の略で万葉集にもうたわれています。^{ありひめ}織姫星という呼び名は、まさに彼女達を想起させ、ここに中国から伝わった星の伝説と結びつき、お盆の準備をする頃の旧暦7月7日に行われる星祭りを、皆さんよくご存知の「七夕」と呼ぶようになったといえます。星空のロマン・・・牽牛 織女の二つの星が銀河を渡り、年に一度の逢瀬を楽しむストーリーには、いつの世の人達も魅せられていたのでしょうか・・・

今年も天の川が見えようが見えまいが・・・7月7日は七夕です！ ♪^{のさば}笹の葉さ～らさら、^{おんさく}軒端に揺れる～♪^{はつもうで}初詣の^{むんさく}絵馬やおみくじも結構ですが、この夏は短冊に願い事を書いて笹に吊り下げてみましょう。その思いが遙か銀河に届き成就することを信じて・・・

七夕の季節、当館プラネタリウムでは^{こしき}五色の短冊に彩られた^{ようざ}笹竹を飾ります。天の川に^{つな}萬の希望を馳せながら、ここはひとつ願い事を星に繋げてみませんか？

<参考文献>

野尻抱影の本1 星空のロマン『銀河考証』筑摩書房
 西角井正慶 編 年中行事辞典 東京堂出版

最近の発掘調査

続報 府中にもあった！

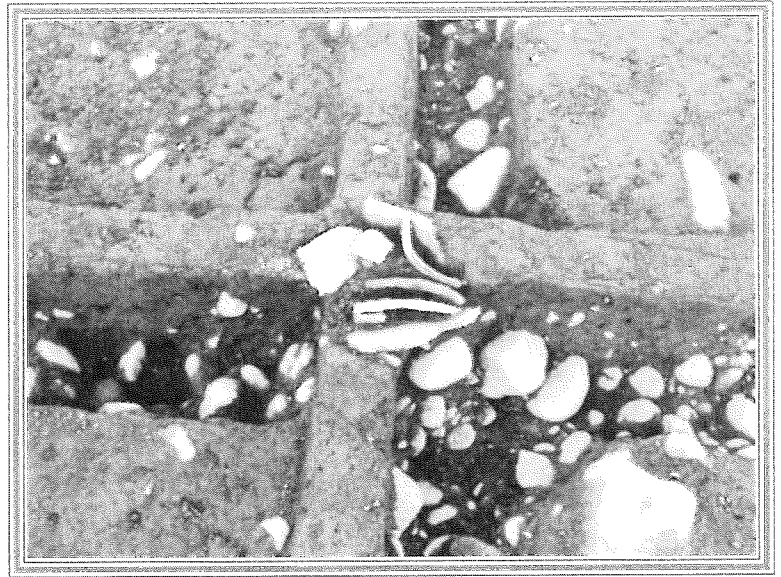
弥生遺跡

東京競馬場弥生時代遺跡確認調査地区

府中市遺跡調査会

湯瀬

禎彦



土器片を小穴にさし重ねた遺構

今回は、昨年東京競馬場内で発見された弥生時代遺跡(本誌62号で紹介)についての続報です。

東京競馬場は府中崖線下の多摩川の低地に位置し、1周2,000m以上の長大なコースを持つ施設です。遺跡は広域な馬場内の北西部(第1地点)と南東部(第2地点)の2か所から発見され、いずれも関東地方に弥生文化が伝播しはじめた頃(約2,200年前)のものでした。この時期の遺跡は都内では多摩丘陵に分布が知られていましたが、東京競馬場からの発見によって、多摩川の低地での人々の暮らしが明らかとなったのです。

東京競馬場の遺跡を具体的にしてみると、第1地点では、大量の土器と石器類が一定の範囲に集中して見つかり、石器製作を行っていた生活跡と思われます。第2地点では、稲作技術と共に伝わったとされる、九州北部を初源とする遠賀川系土器や、弥生時代の墓の一種「再葬墓」の可能性がある2つの埋設土器などが発見されました。また、2つの地点の遺物には、縄文時代から続く狩猟具の石鏃や、縄目の文様が施された土器、北関東や東海地方の影響を受けた土器も確認され、当時の人々が縄文時代の伝統を受け継ぎながら、他の地域と広域な交流をしていた様子をうかがうことができます。

こうした成果を受け、今年早春には第2地点の周囲で再び発掘調査を行い、新たな発見がありました。まず、弥生時代の遺物は東西約40m以上、南北約20mの範囲に分布し、その中に第1地点と同様に土器と石器類の密集する場所がありました。また、前回確認された2つの埋設土器の近くから、土器片を小さな穴に差し重ねた特殊な遺構が発見されています。これは、何らかの祭祀に関係するものと考えられます。以上のように今回の調査によって、第2地点では第1地点と同様に石器製作を伴う生活跡の存在が明らかとなり、再葬墓とみられた2つの埋設土器は祭祀遺構の可能性を考慮する必要もでてきました。

このように、発見された遺跡からは多くの貴重な情報が得られています。今後の整理作業の本格化により、埋設土器をはじめとする弥生時代遺跡の性格が一層解明されることでしょう。また、多摩川低地での発掘調査が進展し、弥生文化の特徴である稲作水田跡が発見されることを期待したいと思います。



土器・石器の集中出土地点

第2地点で今回見つかった、土器と石器の集中出土地点。石器製作を伴う生活の跡と考えられます。

*最近、加速器質量分析(AMS)法によって炭素14年代測定は飛躍的に精度を増していて、弥生時代の開始年代をめぐっても、従来説を大きくさかのぼる可能性が指摘されています。ただ、この新説は提出されたばかりで、課題もいくつか残されているようなので、ここでは従来の年代観に基づいて記述しました。

□ 展示会への招待

むかしの道具展

— 思い出、伝承 —

平成15年7月19日(土) ~ 8月31日(日)

本館特別展示室にて 博物館観覧料で入場できます

博物館の収蔵庫のなかには、たくさんの人たちの思い出が詰まっています。これらをいつまでも伝えていくことも、博物館の使命のひとつです。

当博物館では、地元の人たちがごく身近な暮らしのなかで用いてきた生活民具を、寄贈を受ける形で収集しています。郷土の森博物館ができて16年、その前身の市立郷土館の時代を含めて40年近くの間、多くの市民の方々の協力があり、集められてきた民俗資料は膨大な量に及んでいます。大部分は衣・食・住・農耕・染織など10の項目に分けられたうえで収蔵庫に収められ、ごく一部は常設展示室の民俗コーナーに展示されています。

博物館ですから、なんでもかんでも集めていいわけではありません。地域の人たちが地元で用いたり、作ったりしたもの。地域を代表するもの、特色がよく出たもの。誰がどこで作った、買った、使ったなど、来歴がはっきりしているもの。思い出話が聞けるものなどが収集にあたっては優先となります。今回は、こうして寄贈された民俗資料、約150点を一堂に会して紹介する企画です。生活民具類にその価値を語り伝えてもらう場とするとともに、博物館の役割の一端を示す機会にもしたいと思います。

(小野一之)



かんのおんこう
観音講の道具

府中市片町で行われていた観音様のおまつり、観音講の道具一式。観音掛軸、木魚、経文、座布団など。2002年11月22日受入。



りゅうどうすい
龍吐水

消防道具。ポンプがない時代に多く用いられた消火用水鉄砲。保管していた家の解体により、2002年9月26日府中市美好町より受入。

展示構成

- ① これって、何する道具？
- ② 思い出の一品 — 捨てられない物 —
- ③ 町や村のきずな — 信仰や講の道具 —
- ④ 職人の心意気 — モノづくりと商い —
- ⑤ 田や畑の仕事 — さまざまな農具 —
- ⑥ 戦争の記憶 — 思まわしい思い出 —
- ⑦ むかしの道具を使ってみたら…

民具発見

佐藤 智 敬

第一回 屋根裏の忘れ去られた呪物たち

府中で普通に使用された、周囲にあふれる色々なモノは、あるとき博物館で「民具」としての価値を発見され、資料として分類・保管されることがあります。ここではその過程を、資料を発見する博物館側の視点と、私の調査体験を通して紹介していこうと思います。今回はモノを現地で観察する意味を痛感した出来事から。

2001年2月、家を建築する際に使用した測量用の棒を寄贈していただける、という連絡を受け、我々は住吉町のある家を訪問しました。その際「屋根裏に養蚕用の道具なんか置いてあるから、必要ならば持っていったいいよ」ということで、梯子を使い、ぎこちない足取りでおそろおそろ薄暗い屋根裏へと登っていきましました。すると、梁にヒモで巻きつけられ、ホコリにまみれた草鞋一对と二本のガラスピンを見つけました。なんだろうこれは？聞けば、詳しくは分からないけれども、その家の上棟式（建て前）のときに大工さんがとりつけたもののようだ、ということでした。

用途不明のモノを「呪物」とか「信仰対象」と即断してしまうのは危険ですが、その形状からみて、おそらく建築儀礼の呪物のひとつだと思われました。そこで同様の建築儀礼がどこかで報告されていないか調べてみました。神奈川県藤沢市川名の「呪いの草履」。昭和44年に採集されたそれは、古い家の天井裏の鬼門（北東の方角）にあったものなのだそうです⁽¹⁾。インターネットでは長野県生坂村の、明治30年築の蔵に「梁の付け根に、福槌が打ち付けて有る。反対側には、草鞋が打ち付けて有る」なる記事を見つけました⁽²⁾。少ないながらも類例の報告が各地にあることがわかりました。そして建築儀礼には、大工さんが建築時に使っていた草鞋や草履の鼻緒を切って棟木に結ぶことで、家の魂を留めるといふ呪いがあるようです⁽³⁾。

草鞋や草履にまつわる呪いは各地で報告されています。寺院に大草鞋を奉納したり、村境に草履や草鞋をぶら下げて、疫病が来るのを防ぐといったものです。府中近辺では、川崎市宿河原の沓稲荷で貰ってくる馬用のワラ沓を戸口に打ち付けば百日咳に効くと言われていました。土地に土着する際に「草鞋を脱ぐ」といい、世話を焼いてもらった家を「草鞋親」とか「草鞋脱ぎ場」など

と言い、親子に似た関係を結んだ、ということも全国規模であったようです。

ガラスピンには木の札がついていて、井戸を掘った時の水を入れていたといいます。縄をほどき、中を確認すると、空っぽでした。何十年かの間に、中の水はなくなってしまったようです。やはり似た例はありました。静岡県引佐町渋川では冬至の日（12月）に屋根裏にある備中焼きの壺の水を換えると火事にならないといいます⁽⁴⁾。

これらのことから考えても、この二種類のモノは、建築儀礼、あるいは家内安全のための呪具とみていいのだと思います。家や船などの

建造に際して、職人の間には秘伝の呪いが伝承されている場合があります。これらもそうしたもののなのでしょう。

この二つの呪物（と思われるもの）は、その場から外され、測量棒とともに寄贈を受けることになり、現在博物館に保管されています。梁から

外された姿を見ると、単なる履物と容れ物にしか見えません。履物としての草鞋ならば、博物館に大量に保管しているし、藁草履の実物を体験制作することもあります。空ピンなどそこらへんに転

がっていても不思議ではありません。しかし本資料のように、そうした通常の用途とはちがった意味を持っていたであろうことを知ると、俄然保管する必要が出てきます。こうしたことを発見するためにも、現地調査は欠かせません。そして今後は、それがどのような意味や用途、範囲をもって伝承されているかなどの研究も必要になるでしょう。

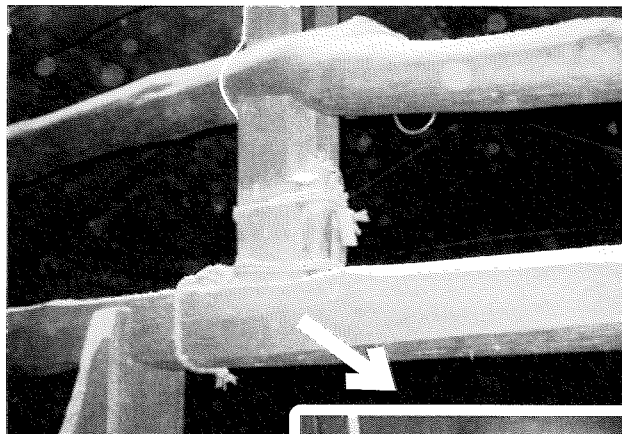
現状では、この二つの資料の詳細については謎が多すぎます。博物館にもこの一例しかありません。しかし府中の家々にこうしたものがまだ残っている可能性は大いにあります。あるいはあなたの家の屋根裏にも何かの呪具が施されているかもしれません。機会があれば覗いて見てはいかがでしょうか？そして見つけたならばぜひ教えてください。

(1) 『民俗資料関係目録』（1980年 藤沢市教育文化研究所）p. 10

(2) <http://www.asahi-net.or.jp/~yi9e-mzn/flame.htm> 2003年5月7日接続

(3) 『図説 民俗建築大事典』（2001年 柏書房）p. 222

(4) <http://www.amy.hi-ho.ne.jp/k-nagayama/gyouji.html> 2003年5月7日接続



星空を気軽に楽しもう！

馬場弘修

～この夏は火星が最接近！～



「星を見に行く」と聞いて、みなさんがイメージするのは「星がたくさん見えそうな真っ暗闇の場所を探すために車でひたすら山道を走り回り、一晩中天体を観察し写真も撮って、翌朝に眠い目をこすりながら帰ってくる」という地味ながらもハードなものでしょう。実際にそういうスタイルもありますが、みなさんは「星だけ見に行く」のではなく郊外への行楽やキャンプなどと組み合わせることが多いはずです。さて、たくさんの星が見られる場所の条件の一つは、町から離れ空気がきれいなことです。そんな場所にはたくさんの自然が残されています。夕方に耳を澄ませば虫の音、明け方には野鳥の声を聞きながらのバードウォッチング、都会では見られない昆虫との出会い、昼間は可憐な花をつける植物を見つけながらの散策、近くを流れる川で釣りや水遊びをするなど、楽しみ方はあなたの工夫次第です（筆者もよく湖畔のキャンプ場へ出かけ、昼間はルアーフィッシングを楽しみます。辺りが暗くなる前に夕食をとり、その後で同行した仲間たちと焚き火を囲みながら、釣った魚の数や大きさを自慢し合います。そんな時、ふと見上げた夜空で輝く星の瞬きは、何物にも変えがたい心地良さを与えてくれます）。また、その土地でしか味わえない郷土料理を食したり、最近各地に増えている日帰り温泉施設へ立ち寄るなど、気軽にレジャーのほんの一部として星見を取り入れてみてはいかがでしょうか？

満天の夜空を楽しむだけなら特別な道具は必要ありません。地面にレジャーシートを広げ、その上にゴロツと仰向けに寝るだけで、天然のプラネタリウムが広がります。町の明かりなどが届かない山奥では、夜空全体

に2千個以上の星が見られるはずです。また、夕方や明け方にはゆっくりと空を横切る人工衛星や、時間や場所を問わず突然現れる流れ星も楽しめるのです。もっと星空を楽しみたいという方には双眼鏡をお勧めします。小さなオペラグラスでもかまいません。人間の眼は口径約7ミリで1倍のレンズだと考えてみましょう。口径30ミリの双眼鏡では眼の約18倍の光を集められます。そのため、肉眼では見えない星の光も捉えることができます。夏の天の川に双眼鏡を向ければ、光の帯の正体がたくさんの星の集まりだということも分かるでしょう。小さな双眼鏡一つで、夜空を見上げる楽しみが何倍にも広がりますよ。

火星の観察は望遠鏡で

この夏の話は「火星の最接近」です。地球のすぐ外側にあるこの惑星は約2年2か月ごとに地球へ近づきますが、今回は地球との距離が約5,576万キロメートルで、ここ数回の接近の中では最大級となります（写真1）。このことから新聞などでも「大接近」という表現が使われているのです。この大接近を実感するには、望遠鏡が必要となってしまいます。さて、望遠鏡で観察すると火星はどのくらいの大きさに見えるのでしょうか？実は8月27日の最接近時でも土星本体より少し大きいだけです。今まで望遠鏡で火星を見たことがある人ならば「今回の接近は確かにすごい！」と感じますが、初めて見た人は「・・・何これ？」と思うでしょう。決して図鑑に載っているような写真と同じように見えると期待しないでください。図鑑などには大口径の望遠鏡やハッブル宇宙望遠鏡などで撮影された画像が多く使われています。

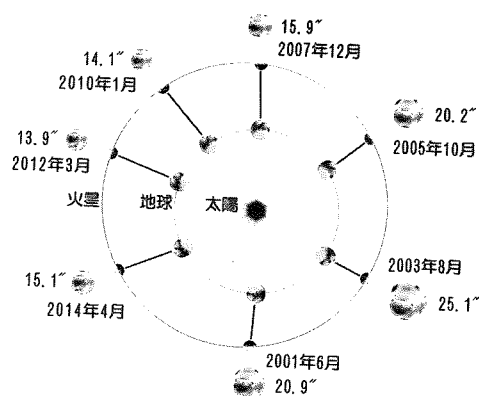


写真1 火星最接近時の地球からの視直径
画像提供：GOTO

私たちが気軽に使える小口径の望遠鏡では、オレンジ色（表面が酸化鉄、つまりサビているため）の円盤像に薄茶色っぽい模様が見えるだけです（写真2は火星に降り立ったマーズ・パスファインダーから見た風景）。火星には地球とは比べものにならないほど薄い大気がありますが、この大気が火星全体をぼーっとした印象にしています。大気がない月のクレーターは細かい部分までハッキリと見えますよね。もっとも月は地球にとっても近いのですが…。

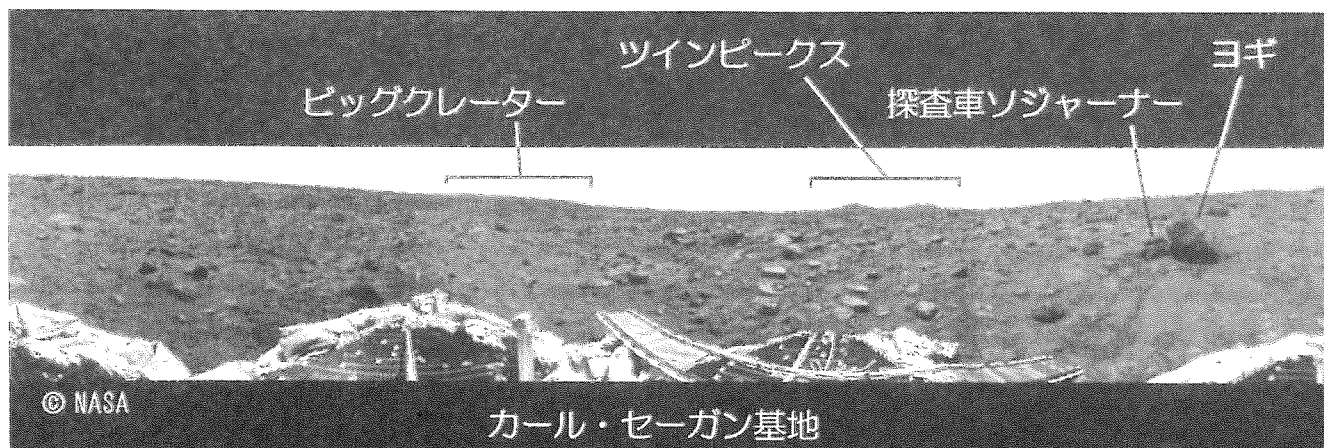
望遠鏡を買う前に

夏休みを前に子供から「望遠鏡を買ってよ！」とせがまれているお父さんやお母さんも多いことでしょう。天文雑誌に載っている広告を見ると、望遠鏡メーカーの製品はとても高価です。そこでディスカウントショップへ行き製造元も分からないような望遠鏡を子供に買い与えると、レンズの精度が悪く架台もガタガタで良く見えません。子供が興味を持ち始めた宇宙への想いも一時のものになってしまうでしょう。その後、望遠鏡は居間の片隅へと追いやられ、いつしか洋服掛けとなってしまい

ます…。もし、この「火星最接近」を機会に望遠鏡を買うなら、専門知識がある店員さんのいるお店で、自分が納得できる1台を見つけましょう。高価な望遠鏡を買っても、子供がすぐに飽きてしまうのでは…という心配があれば、購入する前に地域の科学館やプラネタリウムで行われる「星を見る会」などへ出かけてみましょう。係りの人からは望遠鏡の仕組みや賢い購入方法など、カタログを読むだけでは分からないことや、近所にある望遠鏡ショップも紹介してくれるはずです。当館でも毎月1回「星空観測会」を行い、みんなで楽しく、さまざまな天体を望遠鏡で観察しています。参加者の中には「買ってはみたものの、使い方が分らない」と望遠鏡を持ち込む方や、この会で初めて望遠鏡を覗いた時のことが忘れられず、自分で望遠鏡を買ってしまった方もいます。また、ただの付き添いで来たはずのお父さんやお母さんが、子供たちより夢中になって望遠鏡を覗く姿もよく見受けられます。そう、図鑑の写真からは得られない感動がそこにはあるのです。

宇宙は夢いっぱい的大海原！

「人は海を見ると、何故か懐かしい想いにかられる」といいます。地球での最初の生命は海で誕生し、その海の中で進化を繰り返した生き物たちは長い年月を経て、やがて陸へ上がったとされています。私たちが海を見て心が癒されることは、自分自身の意識が及ばない潜在的感覚、いや本能の一部として組み込まれているのかもしれませんが、さらに遡れば、原始の海で生命の素になった物質は宇宙空間からやってきたと考えられているのです。つまり、夜空を見上げたときにも同じような感覚を得られるのではないのでしょうか？そうです、私たちの想像力は宇宙と同じように無限の広がりを持っています。そして、子供たちの想像力や宇宙への夢を膨らませてあげられるような手助けをするために、まず私たち大人が心の余裕を持ちたいものです。



元気!

博物館ボランティアだより ⑤

さて、ボランティアグループ紹介の殿にひかえしは、古文書整理班です。この博物館で扱っている古文書とは、近世江戸時代の社会で、日常生活に使われた文字の記録で、手習い塾や指南所で身につけた文章です。その上、保存状態の良くないものには虫食いや汚れが目立ったり、自己流のくずし方や宛て字もあり、解読にあたっては長時間を費やすことがあります。

郷土の森博物館では解読する人材の育成も兼ねて開館以来「歴史講座」が開講されています。初級1～3年・中級1～2年、最長計5年の期間をかけ、くずし字の解読、歴史の学習、実地見学等の研修をします。

定年後の第2の人生として受講を始めたものの、5年間は想像以上の忍耐を必要とし、途中で断念する人もありました。しかし、5年間で修了した1期生の中で、向学心に燃える有志が「郷土の森古文書勉強会」を作り、そ



の後も後輩の卒業生も誘って研鑽を深めて参りました。

郷土の森博物館ボランティアの制度がまだなかった5年前、一足先に、このグループの中より希望を募って、賛同した人たちが母体となってボランティアが発足しました。その後は、講座の修了生を受け入れながらメンバーの充実を図っています。現在総勢15名。

毎月第1・第3木曜日、歴史担当学芸員と一緒に、取扱い方、注意事項その他について助言を受けながら未整理の古文書を解読、分類する活動を実施しております。

多種多様な古文書にふれる事によって、昔の風俗や習慣に驚かされると共に、それが楽しみと喜びに繋がり、加えて仲間同士の交流も深まり、集まりの日が待たれる心境のこの頃です。

有意義に過ごせるこの一日が、我等にとっては生きがいであり、又老化防止に役立っているのではないかと考えて、出来る限り、ボランティアに励みたいと思っています。(石井由光)

「誰兵衛さんは悪筆だからなあ」だの「何屋じゃこんなもんも売ってるのか」とか、近所の噂話かと思えばこれが150年も前の人達のこと。古文書整理班員の気分はすっかり江戸時代人、というわけではなく、これもあれも古文書を読み解くための知識の蓄積です。

「この字がキーワードなんだけど……」「ねえねえ、なんて字だと思う？」メンバーの間をぐるっと回っている内に「こうだろきっと」ということになって、文殊の知恵以上です。

こうやって1点1点、書かれた年代や差出・宛名等の情報を採り、タイトルが付けられ、‘わけの分らない字の書かれている小さくない紙切れ’は地域の歴史を語る史料となっていくのです。

市民からの寄贈や寄託という形で受け入れた資料を、見学や研究のために利用しやすいように整備しておくのは博物館の務めですが、このためには多くの労力が必要です。しかしだからと言って、館が当然かけるべき労力を肩代わりしてもらうためだけにボランティア制度を設置しているわけではありません。

もうずいぶん前になりますが、この「あるむぜお」の41号に『郷土の森ボランティア』という一文を載せたことがあります。そこには、やはり古文書整理を例にあげて「時間をかけて館との信頼関係を築きながら‘仲

間’となり、博物館の人的な支えともなってくださるボランティアの協力」を目指したいと記しています。上に紹介している活動はこの折の計画が実現したものです。

そして「あるむぜお」60号から月号ご紹介した様に現在では郷土の森博物館ボランティアとして5つの班、70名以上の方たちが登録し、2001年度から本格的に活躍し始めました。

博物館とボランティアはあくまでも対等で、仕事を頼むのではなく、館は機会を提供し、自主的な活動の場を保証していく、というのが新たに発足したこの制度の趣旨になっています。

この主旨をよりよく活かすためには、この博物館設立の目的や運営方針をお互いによく理解し合い、‘地域にとって、利用者にとって、いい博物館を作ろう！’というところで意気投合し協力できることが必須です。

「あるむぜお」の43号に『郷土の森のコンパニオン』と題したように、館と、ボランティアという市民と、そして利用者という市民が、郷土の森博物館という可能性一杯のテーブルで、生涯学習という美味しい‘パン’を共に味わう仲間(コンパニオン)’でありたいと思っています。(馬場治子)

これからも

元気!

平成 14 年度 寄贈資料一覧

	寄贈者	資料名	分類	数量
1	鈴木進	野鍛冶道具	民俗	1括
2	御舟初栄	暦など	民俗	72点
3	田中宣俊	オトリ魚籠	民俗	1点
4	中田豊作	桶・木鉢など	民俗	10点
5	五木田秀子	軍刀	民俗	2点
6	田中正男	学生補助消防隊腕章	民俗	1点
7	桑田健一	箱枕・防空頭巾など	民俗	7点
8	市村隆治	千歯扱き・風呂鍬など	民俗	6点
9	村田志蔵	ふいご	民俗	1点
10	吉村宏	ひのし・十能	民俗	2点
11	榎本平三	銭湯用具	民俗	1括
12	福島守敏	木槌	民俗	2点
13	矢島中	焼き物の碁石	民俗	1括
14	舟見紘一	金盥・やかん	民俗	2点
15	小川小枝子	龍吐水・灯台・百味箱など	民俗	7点
16	住崎岩衛ほか	観音講道具	民俗	1括
17	鈴木進	庚申講資料	民俗	2点
18	猿田寿子	半纏	民俗	4点
19	舟田浩子	ひな人形	民俗	1括
20	大久保博	念仏講道具	民俗	1括
21	平嶋晨子	オルガン	民俗	1点
22	工藤和美	日の丸寄書・弾除け帯	民俗	3点
23	芝辻宏	一斗舁・家庭用酒購入票など	民俗	6点
24	大室智夫	角樽	民俗	2点
25	桑田健一	桑田家文書Ⅱ・Ⅲ	歴史	2括
26	榎本隆乗	北多摩郡是政耕地整理施行地現形及予定図	歴史	1点
27	小川小枝子	小川義純家文書	歴史	1括
28	前田光子	前田氏筆「筆のすさび」	歴史	1点
29	中山真治	大國魂神社採集瓦	考古	1点
30	都近代文学館	東京都近代文学博物館移管書籍	村野四郎	70冊

	寄贈者	資料名	分類	数量
31	菊池敏夫	府立第二中学校同窓会員名簿	村野四郎	1点
32	村野ヒサ子	村野四郎手跡染袱紗	村野四郎	1点
33	村野ヒサ子	句集「とうきび」	村野四郎	1点
34	村野晃一	村野四郎遺品(万年筆)	村野四郎	2点
35	上野久	村野四郎自筆色紙	村野四郎	4点
36	石川文也	村野四郎手跡染立川高校手巾	村野四郎	1点

平成 14 年度 寄託資料

	寄託者	資料名	分類	数量
1	菊池敏夫	菊池家文書Ⅲ	歴史	一括

平成 14 年度利用状況

(H13. 4. 1 ~ H14. 3. 31)

(H14. 4. 1 ~ H15. 3. 31)

単位：人

区分		有料		減免	合計
		一般	団体	(障害者等)	
博物館観覧者 開館日数310	大人	166,577	13,114	16,993	196,684
	子供	50,145	34,812	6,029	90,986
	小計	216,722	47,926	23,022	287,670
プラネタリウム観覧者 投影日数292	大人	17,830	2,698	1,863	22,391
	子供	9,693	11,581	2,495	23,769
	小計	27,523	14,279	4,358	46,160
合計		244,245	62,205	27,380	333,830

—郷土の森博物館 新刊紹介—

・府中市郷土の森博物館紀要第16号 (600円)

＜内容＞武蔵国府における手工業生産（深澤靖幸）

武蔵国府と「調布の玉川」（小野一之）

消えてゆく湯煙（博物館ボランティア資料整理班 & 佐藤智敬）ほか

・府中市内家分け古文書目録6 押立町有文書目録2

(400円)

・特別展『世界の昆虫博2002』展示解説書 (600円)

・ブックレット3 『詩人 村野四郎』(800円)

・ブックレット4 『武蔵の国府と国分寺』(500円)

・平成13年度府中市郷土の森博物館年報 (400円)

あるむぜおは定期購読できます

「あるむぜお」は春夏秋冬の年4回発行しています。送付ご希望の方は、4回分の送料として320円を添え、本館1階の受付カウンターで申し込んでください。

たま RIVER WARS

① 水源林の奇跡

中村武史

多摩川…その全長は138kmに及び、流域面積は1240平方km、それほど大きな川ではないが、古くから流域に住む人々の生活に多大な役割を担ってきた…その水の旅は山梨県の笠取山山頂にその端を発し、奥多摩、青梅、武蔵野地を流れ下り、都市部を通過して東京湾に達する。都市の人間にとっては数少ない自然の残る貴重な環境であり、かつ癒しの場所と言ってもいい。その多摩川で体験した、遠いあの夏休みの記憶…これからお話しするのは、4人の仲間達が遭遇した世にも奇妙でスリル満点の川下りのエピソードなのである。

東京多摩地域に住む仲良し中学生、エノキンこと榎本欽一、セイコこと鎌倉山聖子、タウ工こと上田裕志、そしてハニーこと羽生田園子の4人組は、夏の自由研究のため8月某日ここ笠取山の頂上に赴いていた。馴染みの深い多摩川の第一歩を自身の目で確かめたいという、極めて自然な動機からである。周到な計画に裏打ちされた自信と、積極的なエノキンの雄弁かつ強引な説得で、ついにそれぞれの親は子供達だけの冒険登山を許したのだった。

塩山市・一之瀬から谷治いを進んで行く山道はまさに森林浴、ブナやミズナラなどの落葉広葉樹に囲まれた道筋の傍からは水のせせらぎも聞こえてくる。

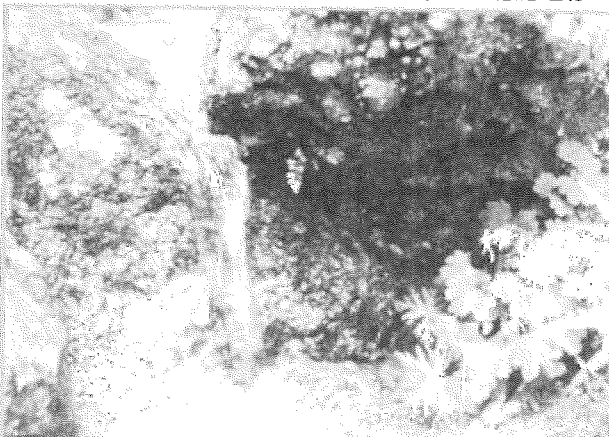
期待以上の景色を目の当たりにした彼らは充実感でいっぱいだった。やがて高さ2m程もある花崗岩が見えてくると、そこはもう山頂であった。岩の上に何やら水神社なるものが祀られているが、これこそ4人が目指した多摩川の原点、“水干”なのである。岩の間からゆっくりと時間をかけて水滴が滲み出ているのだ。多摩川源流域は、東京都水道局が所管する人工林28%、天然林69%で占められる広大な水源林を有している。この緑のダムによって大量の雨水が地下に貯えられ、地下水や川に安定した量の水を供給するという仕組みを生み出す。地中から湧くその一滴が山頂の花崗岩から染み出して、水の長い長い旅が始まる…多摩川の始まりを目前に同士達は感激のひとつときを分かち合った。ひと夏の冒険はこの時点では大成功だった…誰一人疑う余地もなかっただろう…

…「あれ？おかしいな、何本か木が倒れてるぞ」下りの道すがらで不自然な光景を見つけたタウ工の言葉に、全員が林の中央部を凝視した。密集した木々の間に木漏れ陽の柱が何本も広がり、光のカーテンを作っていた。幻想的な輝きに魅せられて8つの瞳が完全にロックされると、その

光は瞬時に拡散して4人を包み込んでしまった。次第に遠ざかる意識の中で、各々は確かな奇跡を見た。それは光の中から蜃気楼のように現れた一人の老人…白装束を身にまとった仙人もどきは、しわがれた声で語り始めた。

「わしは多摩川源流域の守護神じゃ、お前たちの心に語りかけている…何故わしが姿を現したか？この源流域で摩訶不思議なことが起こったからだ…このあたりににはたくさん大型動物が生息しておる、イノシシ、ニホンカモシカ、ツキノワグマ…近年かなり下流の地域にまで進出したやつもいたようだが、これに大いなる闇の意思が加わったのじゃ…ニホンザルの大ボスが仲間を引き連れて川を下り始めた！まるで操られているようにだ。ほれそこの大木…やつらがこれ見よがしに切り倒していきよった。手始めに山の保水力を奪い、土砂流出をも狙ったのかどうか…この老体が精一杯食い止めたが…わしはもう限界だ。この先、川を下りつつ途中で様々な悪事を働かせるに違いない。闇の意思とは…わしとは相反する多摩川源流域の暗黒面なのじゃ。多摩川に意図的な反乱を起こさせようとしている…何と言う事だ」

一同尋見心地の中ではあったが、はっきりと同じメッセージを受け止めていた。セイコが寝言もどきに、「どうして私たちにそんな話を？」と問いかける。待てましたとばかりに源流神は、「純粹で絆の強いお前たちだからこそ頼む、この事態を救ってく



多摩川源流水

撮影：上田大志（多摩川センター）

れんか？サルたちをこの水源林に連れ戻したい…何とか生け捕りにして戻って来て欲しいんだよ」「そ、そんなこと出来るわけないよ！俺たち中学生にどうしろっての」エノキンが咆える。「いいや…お前たちなら必ずや達成できる！わしが見込んだ川の勇士達なんじゃから」「でも、どうやってニホンザルを追うの？」ハニーが心細げに呟く。「とにかく川を下るんじゃ、この先、二つの川が合流する場所に一艘の舟を用意した。力を合わせてそいつを漕いでゆけ、サルの集団は川に沿って下りながら意思のおもむくままに悪さを重ねる腹つもりだ…わしにはわかっておる。さあ、一刻も早く阻止するのだ！」

水干から100mも下ると伏流水が一筋の流れをつくり、やがて細く急な一之瀬川となって谷合いを蛇行していく。さらに下って青梅街道と搭する所で柳沢川と合流し丹波川と呼ばれるようになる。まだまだ深い溪谷の続く険しい道のりだ。催眠術から解き放たれるかのごとく覚醒すると、4人は再び歩を進めはじめた。行く手に待ち受ける困難の大きさも知らずに…

つづく